

はじめに

この問題集は、大学入学共通テスト、あるいは私大入試の「古文」における客観式（マーク式）の設問への対応力を身につけるために作成したものである。この種の設問への対応力は、古語力・文法力・文章読解力・古文常識力が必要であることは言うまでもないが、それ以外にも選択肢をしっかりと見抜く能力が必要となる。

そこで本書では、古語力・文法力を確認し、統合的な読解力を高めながら、客観式（マーク式）の設問への対応力を身につけることを目的として設問を作成・編集した。

第Ⅰ部（知識・技能確認編）では、基本的な古語・文法のドリル問題を配置した。ここは、今まで学習してきたであろう、古語と文法の基礎を確認できるものとなっている。この段階での躓きが多い人は、再度、古語の習得と文法の復習をすることが必要である。

第Ⅱ部（基礎レベル演習編）では、少し短めの文章の問題を用意した。大学入学共通テストや私大入試の本文と比べると、物足りなく簡単に感じるかもしれない。しかし、古文が苦手な受験生は、まずこのレベルのものを軽く解けるようになることを目標としよう。最初から、本番並みの長いものや難しいものに出して、挫折してしまうより、まずは少しやさしめのものを、しっかりと読み、解く力を身につける方が現実的である。

第Ⅲ部（基礎レベル完成演習編）では、大学入学共通テストで出題される形式を意識して作成した問題をそろえてある。ただし、本文はやや短く、設問も少しやさしめとなっている。

第Ⅰ部から第Ⅲ部へと進めて学習していけば、本番の問題を解く力が身につけていることが実感できるだろう。

ここで身につけた力をもとに、さらに練習を続けてほしい。そのための問題集として、『共通テスト総合問題集・国語』や『共通テスト過去問レビュー・国語』が共通テスト対策用としてあるし、私大入試のためには、『中堅私大古文演習』『有名私大古文演習』『首都圏「難関」私大古文演習』『入試精選問題集・古文』『入試によく出る古文の徹底演習』（いずれも河合出版刊）があるので、そちらも利用して、さらなる実戦力を身につけるようにしてほしい。

目次

第Ⅰ部 知識・技能確認編	1
--------------	---

問題編 解答・解説編

第Ⅱ部 基礎レベル演習編

第1問	『伊勢物語』	44
第2問	『うつほ物語』	50
第3問	『大和物語』	56
第4問	『今鏡』	62
第5問	『源氏物語』	68
第6問	『平家物語』	74
第7問	『更級日記』	82
第8問	『十六夜日記』	88
第9問	『栄花物語』	94

第10問	『古今著聞集』	100	62
------	---------	-----	----

第11問	『撰集抄』	106	68
------	-------	-----	----

第12問	『枕草子』	112	74
------	-------	-----	----

第Ⅲ部 基礎レベル完成演習編

第13問	『かざしの姫君』	120	82
------	----------	-----	----

第14問	『赤染衛門集』	128	90
------	---------	-----	----

第15問	『うつほ物語』	134	98
------	---------	-----	----

第16問	『大和物語』『宝物集』	142	108
------	-------------	-----	-----

第17問	『西行上人談抄』『今鏡』	150	116
------	--------------	-----	-----

第18問	『松浦宮物語』	158	124
------	---------	-----	-----

第19問	『俊頼髓脳』	166	134
------	--------	-----	-----

第20問	『栄花物語』『紫式部日記』	176	142
------	---------------	-----	-----

付録	文法ポイント	149	
----	--------	-----	--

第13問

次の文章は、「かざしの姫君」の一節である。姫君は草花を愛する女性であったが、ある日、庭の菊の花をながめていると、少将と名乗る男が現れて契りを結び、少将はその後姫君のもとへ通うようになった。以下は、帝（本文では「君」）が姫君の父（本文では「中納言」）に菊を献上するように命じた夜、憔悴した少将がやって来て突然別れを告げた場面から始まっている。これを読んで後の問い（問1～4）に答えよ。（配点 45）

ややありて少将、涙のひまよりも、「今ははや立ち帰るなむ。あひかまへてあひかまへて思し召し忘れ給ふな。みづからも、御心ざし、いつの世に忘れ奉るべき」など言ひて、鬢（びん）の髪を切りて、下絵したる薄様（うすよう）に押し包みて、「もし思し召し出でむ時は、これを御覽ぜさせ給へ」とて、姫君に参らせて、また「胎内にもみどり子を残し置けば、いかにもいかにもよきに育ておきて、忘れ形見とも思し召せ」とて、泣く泣く出で給へば、姫君も御簾（みす）のほとりまで忍び出でて見やり給へば、庭の籬（さき）のあたりへたたずみ給ふかと思ひて、見え給はず。

かくてその夜も明けぬれば、中納言は菊を君へぞ奉らせ給ひけり。君、御覽（みらん）限りなし。

姫君は夕暮れを待ち給へども、少将は夢にもさらに見えざれば、いたはしや、姫君は、梢（こずえ）のほかなる月かげはくまなき、夜半（よな）の空なれど、涙に曇る心地して、長き夜な夜な明かし給ひて、ある時、その人の言ひ置

第13問

【解答と配点】

問 4	問 3	問 2			問 1			設 問	正 解	配 点
		(iii)	(ii)	(i)	(ウ)	(イ)	(ア)			
④	①	④	③	①	①	②	⑤			
6	6	7	7	7	4	4	4			

【出典】

○「かざしの姫君」

室町時代に書かれた短編の物語を「御伽草子」と呼ぶが、その中の一つ。作者は未詳。

草花を愛するかざしの姫君が、ある秋の夕べ、菊花の衰えゆく様を惜しんでいると、少将と名乗る男が現れ、契りを結ぶ。少将はその後も通って来るが、帝が花揃えのため、かざしの姫君の父である中納言に庭の菊を差し出すよう命じた日、少将は姫君に二度と逢えない旨を告げ、形見に自らの髪を切って姫君に残して去る。その後、姫君が形見の包みを開くと、そこには黒髪ならぬ萎れた菊があり、姫君は少将が菊の精であったこと、花揃えのために宮中に献上されたことを悟る。やがて父母に事情を打ち明けた姫君は、少将の娘を生んで亡くなる。十数年後、菊の精の少将とかざしの姫君との間に生まれた娘は、美しく成長し、女御になって皇子、皇女をもうけて栄えた。

○「大和物語」

第3問の【出典】を参照。

【本文の要旨】

本文は、かざしの姫君が少将の形見を見て、少将が菊の精であったことを知る場面である。

第一段落は、姫君に別れを告げた少将が、姫君に形見を残す場面

である。少将は、髪かみの髪を切って姫君に渡し、姫君に、お腹はらに自分の子が宿よもっていることを教え、自分の忘れ形見としてよく育てるよう頼んで、去っていく。

第二段落は、中納言が庭の菊を帝に献上し、帝がそれを見たことが語られる。

第三段落は、姫君が一人物思いにふける場面である。少将が現れないので、姫君が見上げる月も涙で曇りがちである。姫君は、幾夜も待って、ついに、最後の夜に少将が置いていった形見の品を聞く。そこには一首の和歌が書かれていたが、和歌は、むなしく萎しれていく菊の花を詠んだものであった。さらに少将が姫君の目の前で切って包んだはずの少将の髪が、今開いてみると菊の花だったところから、姫君は少将が菊の精であったことを悟り、菊の花園に出て悲嘆に暮れる。

「花こそ散らめ、根さへ枯れめや」は古歌の引用である。引用文以外にも『古今和歌集』秋下巻にもある。この作品では、かざしの姫君が、在原業平の詠じたこの古歌を、少将を失った自分の身の上に通うものとして思い起こしている。

【全文解釈】

しばらくして少将は、涙を流す合間にも、「今となつては早く立ち帰ってしまおう。けつてけつて（私のことを）お忘れにならないでください。私自身も、（あなたの）御愛情を、いつの世に忘

れ申し上げようか、いや、忘れ申し上げるはずはない」などと言つて、髪かみの髪を切つて、下絵を描いた薄手の紙に押し包んで、「もし（私のことを）思い出してくださいなら、その時は、これを御覧になつてください」と言つて、姫君にさしあげて、また「（あなたの）お腹の中にも幼な子を残しておくので、どうかどうかよいように育てておいて、（私の）忘れ形見だともお思いになつてください」と言つて、泣きながら出てお行きになるので、姫君も御簾みすのそばまで人目を忍びつつ出て見送りなされると、（少将が）庭の籬よきのあたりへ（出て）しばらく立ち止まりなさるかと思つて（そのすぐ後）、（お姿が）お見えにならない。

こうしてその夜も明けてしまったので、中納言は菊を帝に献上しなされた。帝は、ご覧にな（つて賞美しなさ）ることがこのうえない。

姫君は夕暮れをお待ちになるけれども、少将は夢の中でもまったく現れないので、いたわしいことよ、姫君は、梢すゑの向こうにある月の光は陰りもない、夜半の空ではあるものの、涙に曇る気持ちがあり、長い夜を幾夜もお明かしになって、ある時、その人（＝少将）が言い残した忘れ形見を取り出し、思いあまって御覧になると、一首の歌がある。

にはひをば……匂いをあなたの袂たもとに残しておいて、はかなく色あせて衰えゆく菊の花だなあ。

とあって、その（人の）黒髪と思つたものは、萎しれている菊の花な

ので、ますます不思議に思いになり、それでは詠んで残した歌までも、菊の精（のもの）かと感じられて、その白菊の花園に歩み出なさっておっしゃることは、「花は散るだろうが、そのうえ根までも枯れるだろうか、いや、枯れるはずがない」と、（昔、在原業平が）詠んだ言葉も、今（自分の）身の上のこととして思い知らずにはいられなかった。たとえ（あの人が）菊の精であったとしても、もう一度（私と）言葉を交わさせてください」と言って、いても立ってもいられないご様子は、ほんとうにもつともなことだと自然と（思い）知られた。（帝の）花摘えがなかったならば、このようなつらい経験はないだろうに、いずれにしても最後まで生き長らえることのできる我が身ではないのと思うにつけても、かえって（姫君が）気の毒だ。

【問2に引用の『大和物語』の解釈】

在中將に、^{さかい}後の宮から菊をこそ所望になったので、（在中將が）さしあげた折に、

植ゑし植ゑば……しつかりと植えておくならば、秋のない時は咲かないだろうか、いや、（秋は必ず訪れるのだから、その時には）必ず咲くだろう。花は散るだろうが、根までも枯れるだろうか、いや、根までも枯れることはないだろう。

と書きつけてさしあげた。

【設問解説】

問1 語句の解釈

(ア) あひかまへてあひかまへて

あひかまへて（副詞）

- ① 〈命令表現と呼応して〉なんとしても。ぜひとも
② 〈禁止表現と呼応して〉けっして。きつと。

下に続いている「思し召し忘れ給ふな」の「な」は、禁止の終助詞なので、「あひかまへてあひかまへて」の意味は、前記②である。同じ言葉を重ねて強調した表現である。少将が別れに際して、けっしてけっして自分のことを忘れるなど言うのは文脈にも合っている。

正解は⑤である。

(イ) さらに／見え／ざれ／ば

さらに（副詞）

- ① そのうえ。重ねて。いっそう。
② 改めて。新たに。
③ 〈打消表現と呼応して〉けっして。ぜんぜん。まったく。

見ゆ（動詞・ヤ下二）

- ① 現れる。
② 見られる。